

山岳遭難増加の一途

「山岳遭難増加の一途」とは、朝日新聞 8 月 21 日夕刊一面に踊る見出しの一つである。この日、ポストから夕刊を取り出し、茶の間のテーブルの上に広げたら、「緊迫夏山救難」という大きな見出しが目に飛び込んできた。運動部の近藤幸夫記者によるレポートである。次の見出しが、「迫る雨雲『往復 4 分収容 1 分、やれる』」。10 日午前 10 時 30 分頃、槍ヶ岳から下山中にヘリの轟音が聞こえた。滝谷の出会いでぐったりしている女性登山者を岐阜県警山岳救助隊員が救助しているところだった。女性は同僚の男性と二人で、滝谷の雄滝を登攀中ハーケンが抜けて墜落、男性は死亡と記事にあった。

3 番目の見出しが、「山岳遭難増加の一途」。全国の山岳遭難は件数、人数共右肩上がり増加、去年は遭難者数が 2,000 人の大台を突破。今夏も 7 月は北アルプスを管内に持つ岐阜、長野、富山各県では遭難件数、人数共昨年を上回る。下山中の高齢者がバランスを崩して転倒、救助要請のケースが目立つ。休日返上で遺体収容作業に当たった山岳警備隊の谷口光洋隊員は、「登山者は山の怖さをもっと知って、万全の備えをして欲しい」と呼び掛ける、とレポートされていた。

前号でも書いたが、7 月 30 日にぼくが札幌に入るや、その 2 日前だったかカムエックで増水で身動きできなくなったガイドグループがヘリで救助された一件を聞かされた。8 月 2 日には、同じ日高山系でツアー登山客 8 人が増水と疲労とで身動きできなくなり、ヘリで救助。これもガイド登山であった。同じ日だったか、幌尻岳アプローチの徒渉で女性が流されて死亡。東京に戻ってきたら、札幌の仲間から「カムエックでまたヘリで救助されました。ガイド登山です」、というメールが入った。そして、18 日には理科大 WV 部の学生 3 人が鉄砲水に流されて死亡。いずれも日高山系という点が、気になるころではある。山岳遭難は、確かに増加の一途だ。なぜか？

再三発言しているが、第一は中高年登山者のさらなる高齢化。「山を知り己を知らば、百山するも危うからず」が、持論である。加齢による体力低下は自明であるのに、登る山の難度は変わっていない。難度が上がるケースもある。

登山情報が氾濫している。昔は還暦過ぎて登山を始める人は居なかったのに、65 歳、70 歳になって登山を始めるという方が少なくない。目指す山はメジャーな山なのだ。体力旺盛な方はともかく、年齢相応である方は、己を知って頂いて山をプランすること。「下りで転倒」というのは、登りで脚筋力がギブアップしているということであり、不相応な山に登ってしまったことの証明であろう。

山と己を知り、実力相応の登山計画ができる自立した登山者育成が、山岳遭難増加に歯止めをかける方法の一つであると考えている。